

# 川崎白雲作品集

より

(21)

34. 「よろこび」



(135×70)×2

左手書き

「右で書いたら習気がある」と左手書きの線や形を探っていた頃のもの (春洋)

36. 「捨」



33×34



川崎 白雲 先生

全身全霊が「書」

— 桐生園の先生 — 中村 隆一

## 和顔愛語

私の勤務しております桐生園には川崎先生直筆の書が玄閣広間や談話室などの壁に掛けて飾られています。(写真参照) これらは、川崎先生が平成十一年当園に入居される以前既に平成四年から入居されていた奥様に面会に来られていた頃にご寄贈下されたものだ。当時の職員から聞いており、私共職員は現在もこの書から先生の暖かい心を感じとり、介護の仕事の糧にしております。

私は平成十四年から園長として着任し、又医師として入居者の皆様の健康管理も担っていました。川崎先生は入居前の何度かの入院生活により下肢筋力が低下し、歩行がやや不安定な状態でしたので、転倒されぬよう見守りや時には手引き支えなどが必要で、若い職員からは「先生、先生」とよく声かけをされておりましたが、総じて穏やかで静かなご老人という印象を私はもっておりました。

しかし年月とともに体力や視力が低下され、認知症の症状も次第に進行し、傾眠傾向が見られるようになりました。

平成十六年頃の或る日、診察の前に体調のことなど伺ったところ、それには直接答えられず、「ここはこうするんです」「これはこうなるんです」などご自分の右手を筆になぞらえて、ゆっくりと力強く宙に動かしながら、真剣な表情で仰しやうとした事が強く印象に残っております。この時の先生の胸中を推し量ることは出来ませんが、書に関する思いが溢れ出たのではないかと思っております。

この頃から次第に食事はご自分では食べられなくなり、全介助でも食べられる量が少なくなってきたておりましたが、この年の十月に発熱と脱水で病院入院となり、約一ヶ月後の平成十六年十一月十四日、慢性腎不全で永久の眠りにつかれました。享年九十五歳でした。在りし日の川崎先生を偲び、心に残ったエピソードを紹介させて頂きました。

高齢者総合福祉施設・桐生園理事長

# 川崎白雲作品集

より

(22)



川崎 白雲 先生

「白雲先生と私」

二つのエピソード

和泉 蒼牛

37 「一つのじゅくし柿」



135×35

38 「地球に立つ」



135×35

左書きの代表作

白雲先生とお会いしたのは一度だけ某年某月のある展覧会の会場だったと思います。「私は和泉蒼牛と言います」と、ご挨拶すると白雲先生は、「和泉蒼牛……しらんなあ……」というお顔をされて会釈をされました。その会釈の品のよさが妙に心に残る最初の白雲先生との一度だけの出会いでした。

白雲先生（梅村先生）のことは、イーデス・ハンソンさんとの訪米の記録をまとめた「ブラシの詩人」での強烈な印象を受け、よく知っていました。その頃の私はまだ学生でした。絵画を目指していた私が、書に打ち込む決心をしたのも丁度この頃でした。

十年ほど前のことですが、白雲先生の展覧会の案内状が届き、白雲芸術を鑑賞しようと喜び勇んで鏡村の《ギャラリー白雲》に行った時のことです。電気が消えており「先程陳列が終わって展覧会は明日からです」とのことです。ガツカリしていると、係りの方が「どうぞ観ていただくさい」と電氣をつけてくれました。助かった……とほっとした気持ちになり、「入場料は？」と、たずねると、「いやいや手帳があれば大丈夫です」……手帳……なんで手帳……と不思議に思いましたが、しばらくして手帳は老人手帳のことだと気づきました。私が、「五十歳になったばかりです」と言うと、その方は、大変あわてて大いに恐縮されたことでした。

白雲先生と聞くと、「ブラシの詩人」とこの事が、頭を過ります。白雲先生とお会いしたのは一度だけなのに。

# 川崎白雲作品集

より

(23)

39. 「壯絶」 一九八六（77才）



135×70

ある医師の壯絶な病とのたたか  
いを見て、筆触に全霊を込める。

40. 「坐」



50×54



川崎 白雲 先生

人としての生き方を教わる

弘瀬 友也

平成七年に「ギャラリー白雲」がオープン。その後、白雲先生が郷里の鏡村で過ごされたのは平成八年から十年までの数年間。ちょうど私が役場に入った頃のことと記憶しています。生活支援ハウス「ほほえみ」から文化ステーションRIOまで歩いて通い、製作に没頭する元気な毎日を通していらつしやいました。先生にはじめてご挨拶したときのことです。緊張で震える私の手をそっと握り、「しつかり頑張りなさい」と笑顔でお返しいただいたことを今でも鮮明に思い出します。

お弟子さんに対しては緊張感をもって接していたと思いますが、村民にとっては気さくで柔らかなおじいさんといった印象が強く、村民のリクエストに応じて揮毫されることもあったと聞きます。ギャラリーのみならず、多くの家に作品が家宝として残されています。

私は書家ではありませんので書のことはいくわかりませんが、先生の作品や言葉から人としてのあり方、生き方といったものを教わりました。先生はよく、「一つ一つの作品を命がけて作らなければならぬ」とおっしゃっていました。これは、私たちが物事に取り組む姿勢にも参考になる言葉ではないでしょうか。「ギャラリー白雲」の作品を入れ替えるたびに、素敵な言葉を発見します。そして、これだけ幅広く、一つ一つ違った表現ができるものかといつも感動させられます。

人の命には限りがありますが、その中で残したものはその人が亡くなっても後世に残ります。ただ、いずれの時代のふるいにかけても残るもの。そのような作品を残すことのできる人はそれほど多くはないでしょう。

私はこの春、鏡を離れることとなりましたが、白雲先生を知る一人として、作品の素晴らしさとともに先生の人間的魅力を多くの方に伝えていければと思います。

最後になりましたが、この高知で白雲先生生誕百年記念展を企画・開催くださいました恩地先生をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

# 川崎白雲作品集 より (24)

41. 「人生一〇〇」 あるお医者さんの言 白雲時年七十七



135×70×2 (全紙二曲屏風)

本当に「人生一〇〇」歳になりそ  
うな勢いで医学も進歩している。



川崎 白雲 先生

膨大な作品を整理して

川崎 慶次郎

白雲先生とは親戚になります。小さい頃から書についての話を聞かされ、関心を持つようになりました。

兄、川崎海雲の後を継いでギャララー白雲で、中岡祥子さん、川崎章恵さん、私と三人で日曜開館業務に当たっています。県内外から作品の鑑賞に来館してくださりうれしく思っています。

所蔵作品は千二百点位あります。所蔵作品基本台帳を作り、表装作品は軸物、額物、屏風に分け、写真や解説等を載せてあります。来館の際はご覧になってください。

篆書、隸書、楷書、行草書、カタカナ、ひらがな等の作品があります。朱と墨をつけて書いた作品、壘濃墨書等があります。

「一笑」 右上にいて書いた作品。

「忘我良縁」 左手書き。ある画家はこれはすばらしいと言ったとの事。

バラエティーに富んだ作品があります。

鑑賞者の感想文を載せておきます。

○「積極」の作品の力強さに感動。六年間欠かさなかったという膨大な量の臨書に胸がいっぱいになりました。私ももつともつと、地道に努力してゆこうと決意しました。

渡り廊下から見える山の美しさも、すごく良かったです。ありがとうございます。

○字体そのものに感動！以上に一字の文字表現から、奥深いものを感じました。

「女」という字から、女性はいかに生きるべきかが判ったようにあります。現代社会が個の尊厳を余りにも言いすぎたため人間関係の悪化が深刻化してきたと思われまふ。「女」の字が表現するように添って生きることも大切だと昔の女性の生き方に今一度、光をあてていきたいと思いました。残された人生、今日「女」という字に、字体にむかって感謝します。

42. 「誠実」 一九八九年（八〇歳）



135×70 (全紙)

# 川崎白雲作品集

より

(25)

43. 「現世極楽」



(135×70)×2

44. 「山」 (墨象作品 No.285)



44×40



川崎 白雲 先生

絶筆

岡本 敏之(木苙)

茶道石州流の宗匠で、私の生涯の師匠となった、故中居作吾郎(宗泉)先生と川崎白雲先生が親友であり、高知師範学校の寮でお二人が同室生活をして居られたことを伺ったのは、私が鏡村の仕事をさせていただくようになってから少し後のことでした。

中居先生の遺品として娘さんから頂いた中に尊敬する両先生の書があります。「中居君に『君書をやれよ』と勧められたのがきっかけだね…」と白雲先生が目を通して居られたのを奇しき縁と不思議な思いで伺ったことでした。

鏡村RIOから川向かいを眺めると、赤い帽子をかぶり、憩の家からこちらへ向かって歩いて来られる、まるで一枚の絵を観ているような白雲先生の姿がよく見受けられました。

途中「鏡村の店RIO」で餡餅を買い、公民館の杉本石館長の差し出すお茶に顔をほころばせながら話をされるのが常でした。

あの日も先生は上機嫌でした。

「一週間ぐらい前に大阪に行つてネ」

「あれ？大阪に行つて居られたのですか？」

「ハイヤーですーっと山奥のお寺に行つてネ。障子を開けたらパアツと広くて明るくてネ。そこで部屋いっぱい大きな紙に『明るい』という字を書いたヨ」

聞いていた私達は、それが一週間前でも大阪でもない、二日前の大和の公民館での話であることにすぐ気づきましたが、誰一人として白雲先生の話の話を遮るようなことはなく、ただ互いに目配せをして聞いておりました。

この大作が先生の最後の作品となり、寂しくも忘れられない思い出となりました。

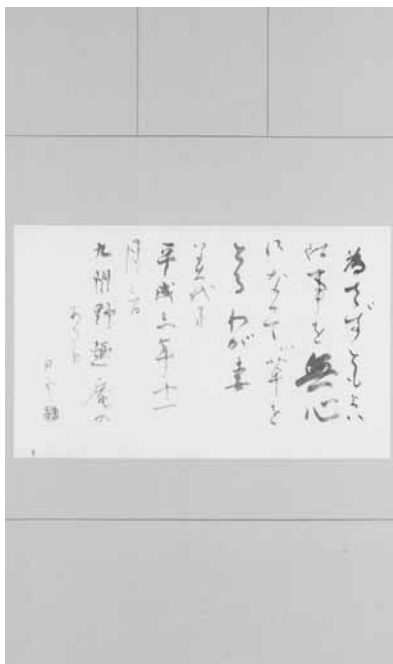
元「ギャラリー白雲」担当

# 川崎白雲作品集 より (26)



川崎 白雲 先生

47. 「為さずともよい…」 一九九一年(八二歳)



42×68

48. 「ちんちんくわい」



135×35

村民と気さくな触れあい

山崎 統

平成元年、『住みよい村づくり』についてご指導、ご提言を頂くために名誉村民をお願いした。当時、私は教育委員会の職員であった。早速、『書と私の半生』と題して、ご講演を頂いた。先生の高いご見識と研究の実績に基づいた自信に満ちたご講演は、人間の生き方について示唆に富んだ内容で感動した。

平成二年、『書展、白雲三昧』を開催し、この頃から、先生にご指導を頂く機会が多くなる。帰郷のたびに教育委員会に立ち寄ってくださり、書に関することや世間話で楽しい時を共に過ごすことができた。先生は、よく村内を歩かれ、村民との気さくな触れ合いや道中の自然観察を楽しんでおられた。そのことは、先生の創作活動に活かされていたように思う。

先生から作品を村にご寄贈くださることにになり、平成七年、新しく社会教育施設『RIO』を建設し、その中に『ギャラリー白雲』を設置した。

平成八年には、先生が鏡村に移住し、ギャラリーで書活動に専念され、書に興味を持つ方々が集い賑わった。先生は特に、書の指導となると真剣な表情となり、緊張した空気を側で感じた。普段は、それは和やかな笑顔で、穏やかな語り口には仁徳が満ちていた。故清川忠彦先生は、先生の晩年を「独自の世界で人間表現を追求された」と言われた。先生が書の道を志し、追い求めたものには、人間性追求と人間表現があったことは、私もうなずける。

ご厚誼を頂いた十数年間に教わったことは多く、白雲先生とのご縁を心から有難いと思う。

# 川崎白雲作品集

より  
(27)

49. 「飛さへら」



135×35



川崎 白雲 先生

50. 「一笑」



135×70

「土と共に生きる」白雲の如く

川村 貞夫

古い木造の旧鏡村公民館の二階和室の床間に一幅の掛軸が掲げられていた。この公民館が建設された昭和三十九年に、梅村先生からいただいた書である。「土と共に生きる」と書かれた先生の掛軸が、私に何かを語りかけてきたのである。明治二十二年に市町村制が施行され、鏡村が誕生してから丁度百周年を迎えようとしていたときである。

当時、公民館に勤務していた私は、村制施行百周年の記念事業に忙殺されていた。鏡村史の発行、鏡賛歌やかがみ音頭の製作、記念式典の準備等である。功績や功労のあった村民表彰などの選考もあった。その時、名誉村民の候補に挙がったのが「梅村」と川崎繁吾郎さんである。

中央での活躍が鏡村に具に伝わることはなかったし、文化人の活躍の伝わり方はスポーツや芸能とは違って、遅いし、地味であるだけに先生の活躍はわかりづらかった。しかし、不思議とトントン拍子にことは進んだ。そして、記念式典の特別表彰で名誉村民の称号が、当時の山崎一幸村長から白雲先生に贈られたのである。

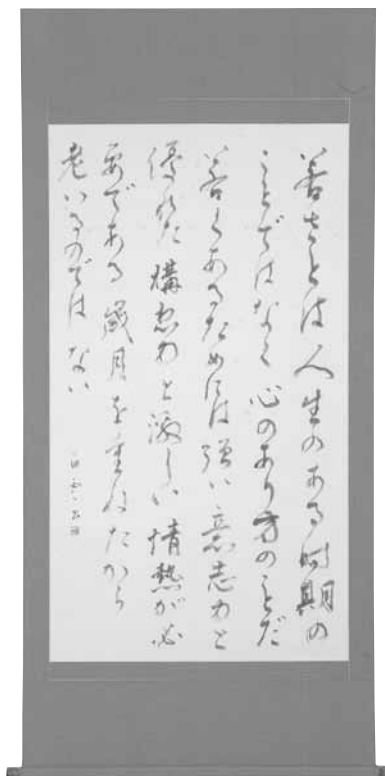
その後、白雲先生は高齢であったが、実に自由人として、白雲の如く変幻自在の行動を村民の前に示した。多くの村民に自ら筆を持って、揮毫して回ったのである。名誉村民の称号の返礼か、生まれ故郷に対する万謝の思いか、テクテク歩きながら村内を巡っては書き、家が上がっては書いた。人生の晩年に当たるこれらの書は、枯淡の感動となって人々に染み渡るように村民の心に溶け込んだのである。百周年の節目に一人の偉大な書家が忽然と村民の前に現れ、多くの村民に大きな衝撃を与え、魂を揺さぶり、そして静かに逝ったのである。

平成十六年偉大な郷土の書家は、村民の惜別の思いをよそに、親しみ深い微笑と書を残して天空のかなたに消えた。白雲の如くに。

元鏡村村長 現高知市議会議員

# 川崎白雲作品集 より (28)

51. 「青春の詩」(サミュエル・ウルマン)



135×75



川崎 白雲 先生

「舗道に咲く花」と「野趣庵」

— 横山久子さんの便りから④ —

先生の「舗道に咲く花」の作には驚きました。この詩文は見たことがありましたが、このように書いていただきますと訴えてくる感情がひしひしと迫ります。帰る先きは南田辺(米田先生のお家)の家でないかと思いますが。

【註】春洋会選抜大作展

H22年2月9日〜14日 東京セントラル美術館

(中略)

次に、お客様の大勢の中へ写真を持ち込みましてすみませんでした。先生の「野趣庵」の写真とついていますか?」のお尋ねのお便りにハイと言えない状態でしたので、お手渡ししたくて持参した次第です。梅津先生と工藤三代子さん(美容師)とのご関係はそれとなくおわかりいただいたと思います。工藤様と父とは大分の岡本病院で相部屋で親しく毎年、八月いっぱい一緒に過ごさせていたでいていた関係です。(検査入院)それで草津での「小さな書展」へもお越し下さり父とも再会をしていただきました。今回大分へいらつしやいとのお誘いを受け、陽さん(ご主人)も長い養生後もあって温泉も身体に良いかということでお誘いになりました次第。「どこか行きたいところはありますか?」とお話で父の野趣庵のその後を見たかったわけです。生憎、雨降り、四時頃となり、工藤様も場所がわからず、電話で尋ね尋ねしてやっと行きました。家の中には電気はつかず、雨戸も開かず真っ暗で、私の持っていた小さなライトで辛うじて撮ったことでした。



「野趣庵」にて

52. 「進む」



35×67



# 川崎白雲作品集 より (29)

53. 「和樂の家」 一九九三年（八四歳）



135×35

54. 「幽玄静寂」



35×67



川崎 白雲 先生

「舗道に咲く花」と「野趣庵」

— 横山久子さんの便りから ① —

二十年前放つたらかしたのでジャングルのように木々は伸び、家まで行きつくのにトンネルをくぐり、木々を踏み越えて大変でした。五年前に鏡の岡本先生、森澤様方と最後の運び出しをした時はまだ明るかったのでよくわかりました。今回、たまたま隣の親子さんが樹々をチェインソーで切りはじめており、その場に出くわして「家の為に日が当らず良くないから」と話していました。写真に所々、切り株が見えるでしょう。それが切られた所です。狸の親子が床下から出入りをし、床下に木々を突っ込んで防いでいるところです。

そんな理由で先生がお話下さった吾一と二人で話し合いたい☺のお話は座る場所すらない状態です。隣の方のご好意で、ぐるり周囲を切つて下さるそうで、吾一、直和にお礼をするよう、陽さんから話したとのことでした。

二人ともこの地に住む意志はなく、孫達もそれぞれ生活があるので、いづれ、さら地にして何とか？と考えているようです。二人とももの共有地ですので、どのようになっていくのか私達は見守るだけです。

二十年程前の父の姿の写真は先生のお考えで、吾一の撮った写真です。フィルムもなく、それだけです。返して下さいね。吾一から聞いたことですが、父のお墓については全て人が写っていますので、四月桜の花の咲く頃、両家のお墓参りに帰ってこようと思っています。その時良い写真が撮ればいいですがねえ。

（後略）

（日22年）二月十九日 横山 久子

# 川崎白雲作品集

より

(30)

55. 「はとぼっぼ」



35×135

56. 「夕焼け」



35×100



川崎 白雲 先生

ギャラリー白雲

岡林 御舟

昭和二十二年に川崎白雲先生は高知師範学校の教師となり教鞭を執っておられました。高知で現在ご活躍中の先生方の中には高知師範学校で川崎白雲先生に学んだ方がおられることと思います。私の叔父も高知師範学校卒業（京都在住・小學校教諭）（昨年逝去）で恩地春洋先生、谷脇梅翠先生等と同窓であるとお聞きしました。そんな訳で高知師範学校と聞くと何か身近な思いがして何か憧れる感じが致します。高知市鏡「ギャラリー白雲」には、白雲先生の作品が数多く掲げられています。作品一つ一つ実に気取らない味のあるほのぼのとしたお人柄を覚えます。私も同じですが、白雲先生の書を見た方は異口同音に「ギャラリー白雲」にこんな宝物があるとは知らなかった。親しみを覚えセンスがありお人柄に感動し元気を頂いた。ゆったりした文字を見て、ゆったりした気持ちになった。日本人として誇るべきものを忘れかけていた。作品を見て今思い出した。書を恋して七十年。私達に見ごたえのある作品を残していただきまして有難うございました。